

啐啄同時

「啐啄同時」は、禅書「碧巖録」の第16則に出てくる言葉です。

「啐」は、卵の内側から雛が卵の殻をつつく音を意味し、「啄」は親鳥が殻をつついて雛が出るのを助けることを意味しています。

つまり、「啐啄同時」とは、卵の中の雛が成熟し、孵化しようとして内側から殻をつつく時、その音を敏感に察知した親鳥が、外からもつついてやって孵化を助けることをいいます。

なお、この言葉は、碧巖録の「鏡清啐啄機」に出てくるものです。

先日、トキの雛が36ぶりに誕生しましたが、5月は野鳥にとって新しい命の誕生の季節です。それぞれの巣の中では、卵の中の雛と親鳥との命を巡るドラマが演じられていることでしょう。

何事にも、逃してはならない絶妙のタイミング（つまり機）というものがあります。

雛が卵から孵化する場合、親鳥が卵の殻をつついて割ってやるタイミングが早過ぎても遅過ぎても、折角の命は世に出ることが出来ません。まさに、「啐」と「啄」は同時でなければならないのです。

これは親子の関係、教師と生徒との関係にもいえることではないでしょうか。親は我が子を愛し、慈しんで育てますが、やがて子は、親の懐から飛び出ようとします。その機を逃さず、親が子の背中を押すことが出来れば、その子は自立への一歩を踏み出すことが出来るでしょう。もし仮に、我が子を溺愛する余り、何時までも我が懐で守ろうとすれば、その子は自立のきっかけを失い、生きる力を失いかねません。また、親離れしようとしないう子に対して、ただ突き放すだけでもダメなことはいうまでもありません。

学校教育ではどうでしょうか。教師の皆さんは、日々、一人ひとり子ども達に、自らの力で生きていける力をしっかりと身に付けさせるよう、教育実践をしているはずで

いずれ子ども達は、自ら自分の殻を破って飛び出そうとする時期が来ますが、自分の殻を打ち破って成長しようとする力を与えてやるのも教師の大きな仕事

であり、その時が来たら、子ども達が自分の殻を打ち破ることができるよう、上手に導いていかなければなりません。

碧巖録ではこう記しています（大森曾玄著「碧巖録上巻」より）。中国に鏡清禪師という偉い禪僧がいらっしやったのですが、修行僧の一人が鏡清禪師に「学人啐す、請う師啄せよ（私はもう充分悟りの境地に達しました。どうか一つ、カウを破って躍り出させて頂きとうございます。）」とといいます。

禪師が修行僧に「還って活くることを得るや（そうか、つついてやってもいいが、お前さん生命は大丈夫かな）」と尋ねると、その僧は「もし活せずんば、人に怪笑せられん（もし私が悟れなかったら、老師は世間の物笑いになりますよ）」とといいます。とんでもない開き直りですね。すると禪師は「是れ草裏の漢（この大たわけめがっ）」と修行僧に一喝します。ここでいう「草裏」というのは、妄想の草の中に埋まっている状態を指しているのだそうで、その意味からすると、私も修行僧とは50歩100歩というところでしょうか。

「啐」と「啄」の響き合いにはこういう厳しい側面があるということですが、一番の難しさは、「啐啄の機」を見極めるということにあります。

子ども達に背伸びする力、自立する力を身に付けさせるのは、親や教師の勤めであり、また、子ども達にその力が備わったかどうか見極めることも親や教師の大きな責任です。そして、その時が来たら、機を逸せず手を差し伸べ、背中を押してやる必要があります。

そのためには、親鳥が雛の発するシグナルを決して聞き逃さないように、親や教師もまた、子ども達の発するサインを見逃さぬよう最新の注意を払わなければならぬと、今更のように我が身に問うているところです。

（塾頭 吉田 洋一）